

Title	青年の職業観と死生観との関連性について
Author(s)	渡辺, 美那子; 平井, 啓
Citation	大阪大学臨床老年行動学年報. 1999, 4, p. 26-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8340
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

青年の職業観と死生観との関連性について

渡辺美那子・平井 啓

1.序論

1-1) はじめに

人は、その人生において様々な経験をする。その経験には、前もって予測可能な出来事もあれば、偶発的で予測不可能な出来事もある。自分が生を受けたこともある意味、偶発的な出来事と呼ぶことができるかもしれない。しかし偶発的に授かった生には、不可逆性、普遍性をもった死がつきまとう。生きるものには、いつか必ず死が訪れるのである。つまり死は、必ず訪れるという意味において予測可能な出来事であると同時に、いつ訪れるか分からないことから予測不可能な出来事であるとも言える。人は、必ず訪れる死にいやがおうにも対峙し、それぞれに考えをめぐらし、準備する。生き方が人それぞれであるように、死に方、死に対する考え・態度も様々である。

最近、フリーター増加現象（特定の仕事を避ける傾向にあること）、自由な転職志向、自分の生活設計に合わせた就労形態を選択すること（望月、1993）などに代表されるように、自分のその時やりたいことを実現させるといった、生き方の個性化がさらに幅広く、また強まってきているように感じられる。死はいつ訪れるか分からないにもかかわらず、健康な若者は、当面自分の死をずいぶん先のことだと考えているだろうということは否めない。しかし生と死は表裏一体をなすものであり、決して切り離すことはできない。漠然と死を考えると、若者はどのように生をとらえるのか。そしてどのように生きているのか、どのように生きていこうと考えているのか。筆者は生き方の一つの表現方法である職業に興味をひかれ、職業観と死生観に何らかの関連性が存在するのではないかという疑問を持った。

ここでは職業を決定することが、Erikson, E.H. (1973) のいう自己同一性確立の一つの指標であるという観点から、青年期後期にあたる若者の職業観と死生観について取り上げたい。

1-2) 青年の職業観について

職業決定は青年期後期の最も重要な発達課題の一つである。Erikson, E.H. (1973) によれば、乳幼児期以来、漸次形成されてきた多数の同一化群が、青年期において社会的役割の獲得という形で統合され、アイデンティティの確立に至るとされる。その社会的役割の獲得において、中心的位置を占めるのが職業決定であり、アイデンティティの拡散・危機は、職業決定の不可能という形で最もよくあらわれるという。代表的な例が、最近指摘されているフリーターの増加である。乳幼児期、児童期、思春期、青年期前期と、問題もなく、一見順調に成長してきた子どもが、高校を卒業したとたん、目標を見失う。進学せず、好きなときにアルバイトをして、表面的には自由気ままに過ごしている。しかしその内面では、現代の高度に複雑化した技術社会に青年が入っていくための準備期間である、

心理・社会的モラトリアム期を延長させ、確立できていないアイデンティティを構築しているとされる。また市村（1993）によると、職業発達段階における大学生は永続的な職業興味が青年期の後期から成人期にかけての安定期に入っており、不明確で移ろいやすいものであったそれが明確化し永続する時期である。それはまた青年期に植え付けられて成人期にまで継続するものは、生涯を通じて固定する可能性が高いという（市村、1993）。

このように、職業決定は青年期の自我の確立の在り方を評価する重要な指標であると考えられる。そのような意味において、大学生の職業未決定とアイデンティティの発達との関連性に注目している研究が増えている。それらの先行研究と、Erikson との視点の違いは、文化的背景にも由来していると考えられるが、心理・社会的モラトリアム期の定義にある。Erikson は心理・社会的モラトリアム期を、青年が自分の社会における適所を見出すための、自由で積極的な役割実験をする期間と考えた。しかし最近の日本の研究では、そのような積極的な意味でなく、アパシーや留年など、アイデンティティの発達が不十分なため職業についての自己決定ができないという、消極的・病的な意味合いにおける心理・社会的モラトリアム期が注目されている。

1-3) 死生観について

死は、全てのどんな人間にも訪れるものとして、様々な側面から思索され、研究されてきた。そして死生観尺度なるものも、多くの側面から作成されてきた。しかし丹下（1995）は、大多数の研究が、死に対する恐怖を多面的に扱ってきたことを述べたうえで、死別体験は恐怖だけで説明し得ないことを指摘している。我々が死を問題にする場合、悲しみ、むなしさ、いのちの尊さ、自分の生き方の自覚などより多岐にわたる観点からのアプローチが必要である（丹下、1995）。

青年期にみられる心的発達は、その過程に自己の人生を問い直し、その方針を決定するという作業や、他者との関係の調整を含んでいる。そのため象徴的な意味も含めて、死という問題に関係する可能性が大きい。目標の喪失、近親者の死、ペットの死、失恋などの“小さな死”である。また、死生観は実際の死をめぐる経験や死に対する思索活動を通して、より豊かなものへと展開していくということが推測される。そしてさらに、上に述べたような日常で経験する“小さな死”を、青年期の豊かな感受性を持って経験することも、それに関連していると考えられる。柏木（1987）はその著書の中で、人は生きてきたようにしか死ねないのだと述べている。医師としての経験から、死にゆく人について、その人の年齢やこれまでの人生、その人の宗教観や価値観によって、どのような形で生を全うしたいかは異なると指摘している。そして、自分に死が迫っているということを比較的受容しやすい人の一つの条件として、継時的自己同一性を確立できていることを挙げている。継時的自己同一性を確立できている人とは、自分の人生を振り返り、その経験のうえにたって現在の自分が、未来の自分へつながっていることを見通せる能力を持っている人である。何らかの困難を迎えているとき、これまでの経験から、それまでの困難をどうにか乗り越えてきたと思い起こし、今の困難も何とかなるだろうと相対化できる能力があれば、それが受容能力につながる。それまで経験してきた“小さな死”へのその時の対処方法で、目前に迫った自分の死という“大きな死”にも対処するというのである。

1-4) 目的

本研究では、自己同一性確立の過程の途上にあると考えられ、就職準備段階にある青年を対象として、職業観と死生観の間にはどのような関連性が存在するかについて調査し、考察を加える。また、職業観については性差・年齢差に関しても、検討を行う。

2.方法

2-1) 被調査者

調査は、主に近畿圏の大学に在学する大学生および大学院生197名を対象に行った。その内、有効回答数96（有効回答率48.7%、平均年齢19.48才）を得た。この調査では、職業未決定の状況にある青年を対象に調査を行ったため、被験者の条件が3回生以下でなければならず、4回生を含む可能性のある21歳以上は除いた。

2-2) 調査方法

調査は質問紙法で行った。調査用紙は属性がランダムになるように考慮して配布され、回収は配布者によって行われた。その際、被調査者の匿名性やプライバシーを保証するため無記名式を採用した。

2-3) 調査用紙の内容と構成

2-3-1) 被調査者の属性

被調査者の性別、年齢、専攻（文系、理系）など個人属性を中心とした項目について質問した。

2-3-2) 職業未決定尺度

下山（1986）によって作成された職業未決定尺度（41項目）のうち、1つの下位尺度を除く32項目を使用した。下位尺度は以下の5つである。「混乱」（職業決定に直面して、不安になり、情緒的に混乱している状態を測る項目；8項目）、「猶予」（今のところ職業について考えたくない状態を測る項目；7項目）、「模索」（はっきり決定はしていないが、積極的に職業について考え、模索している状態を測る項目；6項目）、「安直」（自分の興味、関心を職業に結びつけようとしないう安易な職業決定態度を測定する項目；7項目）、「決定」（既に職業を一つにしぼっているか、自分の職業決定に自信を持っている状態を測る項目；4項目）。

この尺度は、アパシーに代表される無気力学生が増加している今日、大学生の職業未決定状況を我が国の実状に適した方法で、実証的に把握していくことを目的として作成された（下山、1986）。発達論的には、青年期後期に至るまでの“自我の確立”度が職業未決定の状態に影響を与えることが考えられる。そこで職業カウンセリングなどの治療的実践場面を想定し、主訴となる職業未決定の状態から、逆に“自我の確立”度を推測し、それに基づいて適切な対応を考えていくというプロセスを念頭に置いて、この尺度は作られている。

2-3-3) 死生観尺度

平井・坂口・安部・森川 (1998) によって作成された、死生観尺度 (27項目) を使用した。下位尺度は、以下の7つである。「死後の世界、魂の信仰」因子 (4項目)、「解放としての死」因子 (4項目)、「生の目的、希望」因子 (4項目)、「寿命、運命観」因子 (3項目)、「死に対する恐怖、不安」因子 (4項目)、「死からの回避」因子 (4項目)、「死への関心」因子 (4項目)。

3. 結果

3-1) 性別、文系・理系の専攻別と、職業観の関係

性差、文理、さらにその交互作用が、職業観に及ぼす影響をみるために、2要因の分散分析を行った (Table1)。その結果、いずれの下位尺度得点についても有意な交互作用と、文理の差は見られなかった。職業観を構成するとされる5つの因子の内、「猶予」因子と「安直」因子に男女間で有意な影響の違いが認められた ($P < .05$)。これは下山 (1986) の報告とは異なり、男性の方が、より職業選択についてネガティブな考え方を持つ傾向があることを示している。具体的には、“今のところ職業について考えたくない”と考えていたり、自分の興味、関心を職業に結びつけようとせず、他力本願的な考え方をしているということである。他力本願的な考えとは、例えば、「学歴やつてを利用してよい職業に就きたい」、「生活が安定するなら、職種は問わない」、「自分がどのような職業に適しているのか分からない」等である。

Table1 : 性別、文系・理系の専攻別と、職業観との2要因分散分析

職業観 因子	性差平均		文理平均		性差 F値	文理 F値	交互作用 F値
	男性	女性	文系	理系			
猶予	0.440	-0.144	0.003	0.230	5.686*	0.013	0.146
安直	0.399	-0.133	-0.066	0.463	4.594*	1.985	0.931

* = $P < .05$

3-2) 年齢と職業観との関係

職業観を従属変数、年齢を説明変数として一元配置分散分析を行った (Table2)。その結果は下山 (1986) の調査結果を一部裏付けるもので、「模索」因子のみが年齢別に影響を受けることが分かった。その差を調べるため、多重比較を行ったところ、19、20才の学生に比べ、18才の学生は、職業についての考えが消極的であるという結果が得られた。

Table2 : 年齢と職業観についての一元配置分散分析および多重比較

職業観 因子	A.18才 平均値	B.19才 平均値	C.20才 平均値	F値	多重比較
模索	-1.17 (1.80)	0.06 (0.99)	0.12 (0.88)	3.26*	A<B,C

* = $P < .05$

3-3) 職業観と死生観との関係

職業観を従属変数、死生観を独立変数として、重回帰分析を行った (Table3)。その際、性別は男=0・女=1と、ダミー変数に置き換えた。その結果、以下のような結果が得られた。「混乱」は「死への恐怖・不安」から有意な影響を受けている。つまり死に対して恐怖・不安が強くない人は、職業選択について考えたときに不安になり、情緒的に混乱する傾向が明らかになった。

次に「猶予」が「死への恐怖・不安」と「性別」から有意な影響を受けている。つまり、死に対して恐怖・不安が強くない男性は、今は職業について考えたくないと思っているといえる。

Table3：職業観（従属変数）と死生観（説明変数）についての重回帰分析

従属変数	独立変数	標準偏回帰係数(β)	従属変数	独立変数	標準偏回帰係数(β)
混乱	死生観 死後の世界・魂の信仰	0.657	猶予	死生観 死後の世界・魂の信仰	0.595
	解放としての死	1.841		解放としての死	1.043
	生の目的・希望	0.84		生の目的・希望	0.835
	寿命・運命観	-0.517		寿命・運命観	0.821
	死に対する恐怖・不安	-3.757*		死に対する恐怖・不安	-2.003*
	死からの回避	-0.066		死からの回避	-0.967
	死への関心	-0.148		死への関心	1.622
	年齢	-0.312		年齢	-0.515
	性別	-1.180		性別	-3.222*
	摸索	死生観 死後の世界・魂の信仰		0.421	安直
解放としての死		0.765	解放としての死	2.009*	
生の目的・希望		-1.273	生の目的・希望	2.601*	
寿命・運命観		-0.621	寿命・運命観	-0.494	
死に対する恐怖・不安		1.874	死に対する恐怖・不安	-1.708	
死からの回避		-0.195	死からの回避	-1.109	
死への関心		-0.416	死への関心	1.511	
年齢		1.408	年齢	-0.336	
性別		0.678	性別	-3.046*	
決定		死生観 死後の世界・魂の信仰	0.327		
	解放としての死	0.003			
	生の目的・希望	-0.102			
	寿命・運命観	0.843			
	死に対する恐怖・不安	2.941*			
	死からの回避	-0.791			
	死への関心	2.261*			
	年齢	-0.489			
	性別	-0.446			

* = $p < .05$

そして「安直」は「解放としての死」・「生の目的・希望」・「性別」から有意な影響を受けていた。つまり人生の目的意識を強く持っていて、さらに死を解放として考えている男性は、自分の関心を職業に結びつけない、他力本願的な考え方をしていると考えられる。

さらに「決定」が「死への恐怖・不安」、「死への関心」から有意な影響を受けていることが分かった。死に対して強い恐怖を持ち、死に関心を持っている人は、すでに職業を一つにしぼっているか、または自分の職業選択に自信を持っている。そして職業観の因子の中で、唯一「模索」因子がいずれの属性にも影響されていないことが見出された。

3-4) 死生観と職業観との関係

次に、職業観が自我確立の一つの指標であるという視点から、死生観を従属変数、職業観を説明変数として、重回帰分析を行った (Table4)。その際、性別は男=0・女=1と、ダミー変数に置き換えた。その結果は以下の通りである。「解放としての死」は「性別」から有意な影響を受けていた。つまり女性は、死を解放としてとらえる傾向があるといえる。

次に「生の目的・希望」は「模索」と「安直」から有意な影響を受けていた。つまり積極的に職業のことを考えていない人、他力本願的な考えをする人は、人生の目的意識を強く持っているという。

Table4：死生観（従属変数）と職業観（説明変数）についての重回帰分析

従属変数	独立変数	標準偏回帰係数(β)	従属変数	独立変数	標準偏回帰係数(β)	
死後の世界・魂の信仰	職業観	混乱	1.022	死に対する恐怖・不安	職業観 混乱	-3.374*
		模索	0.310		模索	4.075*
		猶予	1.084		猶予	-1.376
		安直	-0.257		安直	0.361
		決定	1.480		決定	1.821
	年齢	-0.619	年齢	-1.377		
	性別	2.253	性別	-1.262		
解放としての死	職業観	混乱	1.517	死からの回避	職業観 混乱	-0.146
		模索	0.466		模索	-0.478
		猶予	1.247		猶予	-1.164
		安直	0.168		安直	0.268
		決定	1.608		決定	-0.948
	年齢	-0.017	年齢	0.459		
	性別	3.230*	性別	-0.879		
生の目的・希望	職業観	混乱	0.724	死への関心	職業観 混乱	-0.382
		模索	-3.201*		模索	-0.960
		猶予	0.756		猶予	1.377
		安直	2.695*		安直	2.170*
		決定	0.955		決定	3.153*
	年齢	0.471	年齢	-0.062		
	性別	1.500	性別	0.537		

従属変数	独立変数	標準偏回帰係数(β)
寿命・運命観	職業観 混乱	0.955
	模索	-0.427
	猶予	2.230*
	安直	0.110
	決定	2.318*
	年齢	-1.288
	性別	2.104*

* = $p < .05$

そして「寿命・運命観」は「猶予」「決定」「性別」から有意な影響を受けていた。それは、女性で、今のところ職業について考えたくない人、自分の職業決定に自信を持っている人は、人生は見えない力によって運命が決められていると考えていることがいえる。

さらに「死に対する恐怖・不安」は「混乱」と「模索」から有意な影響を受けていた。つまり職業選択のことを考えて不安にならなかつたり、混乱しないような人、積極的に職業について考えようとする人は、死に対する恐怖・不安が強いことがいえる。

また「死への関心」は「安直」と「決定」に有意な影響を受けていた。つまり他力本願的な考えを持っていて、自分の職業選択に自信を持っている人は、死への関心が強いという。

4. 考察

4-1) 性別、文系・理系の専攻別と、職業観の関係

文系・理系の専攻別では、理系の学生の方が「安直」傾向が高いことが分かった。この結果は当然のことのように思える。なぜなら理系学生は社会に出たときに役立つ何らかの技術を身につけているので、就職活動におけるそのような“武器”を持ち合わせていない文系学生よりも、他力本願的な考えを強く持っているからであると考えられる。また理系学部では、研究室の推薦といった画一化されたプロセスで、就職活動がなされることが多いので、“研究室に所属すれば、何とか決まるだろう”という安易な考えに帰属される「安直」傾向とも取ることができる。

次に性差について、先行研究とは異なる結果が得られた。下山(1986)によると、女性が男性よりも職業選択が未熟で、未決定であるという。しかし今回の結果によると、男性の方が現実逃避が強く、他力本願的な考えを持っているという。この結果は、一見矛盾しているように思える。しかし、下山(1986)が同じ調査結果の中で、男女によって職業未決定の安直傾向の持つ意味が異なることを報告している。それによると、男性では安直傾向の強さは、自我の確実性、行動の能動性、自己受容の低さに対する防衛的態度であり、女性では、自己の統制力や対人的親密性の高さに基づく余裕ある態度であるという。近年、男女雇用機会均等法が見直され、フェミニズム等の動きにより、女性にとって働きやすい職場づくりが行われ、浸透してきた。しかし、女性の社会進出が著しい状況の中で、寿退社のように結婚を機に家庭に入る女性も減少してはいないと考えられる。つまり、男女の

職業・社会における役割は、完全には同等になってはいない。女性には、働く権利、働かない権利の両方与えられているといえるが、男性は一度就いた職業を一生の糧とする風潮がまだ根強く、現在の不況、就職難といった厳しい社会情勢を考えると、男性にとって職業選択について思索することの難しさがうかがえる。そのような社会情勢において、職業についての思索が難しいことは、ひいてはモラトリアム期の延長につながるとも考えられる。

4-2) 年齢と職業観の関係

結果によると、18才の学生は19、20才の学生に比べ、職業について積極的に模索していないということが分かった。これは下山（1986）の先行研究を一部裏付ける結果となった。「模索」は、2回生になって減少したが、2回生と3回生の間では、大きな違いはなかったということである。暦年齢と学年という違いはあったが、18才=1回生、19才=2回生、20才=3回生と考えると、結果は一致する。本来、職業観を問題にする場合、暦年齢よりも学年差の方が、分かりやすい指標となると考えられる。今回学年差を測定しなかったのは、不備であり、今後必ず調査に加えられなければならない。

しかし死生観、職業観といった観念的なものは、暦年齢に支配されるのではなく、個人の経験などによって形成されるものであり、認知発達や社会性の発達などと密接に関わっている。そのため、暦年齢、学年差という画一的な変数では測定できないと考えられる。丹下（1995）の指摘では、暦年齢は発達の指標とみなすにはかなり問題があるという。丹下は、その研究で扱った被調査者が、年齢差が非常に狭く、個人差の大きい自我同一性の確立に取り組む青年期にあることを踏まえた上で、個人の人格や自我の様相は必ずしも年齢に比例するものとはいえないため、死生観のような観念的なものの展開に至っては、年齢が発達の代替的指標とはなり得ないと述べている。職業観も、“観念的なもの”と定義される範囲に含まれると考えられるので、そのような画一的な指標ではなく、自我同一性の確立度、心的発達の程度を測定し、それを一つの指標とすることが求められている。

4-3) 職業観と死生観の関係

4-3-1) 職業観を従属変数、死生観を説明変数とした場合の結果について

死生観とは、“死”に対する考え方であると同時に、“生”に対する考え方であるとの視点から、職業観を従属変数、死生観を説明変数とした場合の結果について考察する。

「混乱」が「死への恐怖・不安」から有意な影響を受けていたことから、死に対して恐怖・不安が強い人は、職業選択について考えたときに不安にならなかったり、情緒的に混乱しない傾向が明らかになった。また「猶予」が「死への恐怖・不安」と「性別」から有意な影響を受けていることから、死に対して恐怖・不安が強くない男性は、今は職業について考えたくないと思っていると分かった。それは換言すれば、男性で死を怖れている人は、職業について考えることを避けていないということである。以上のことを考え合わせると、死を怖れている人は、生の質をできるだけ向上させたいと願い、精一杯自分らしく生きようとするため、自分らしさを表現する一つの手段である職業について、積極的に考えようとしていると言えるのではないか。そしてその傾向は、男性に顕著である。さらに「決定」が「死への恐怖・不安」と「死への関心」から有意な影響を受けていた。つまり死

に対して強い恐怖を持ち、死に関心を持っている人は、すでに職業を一つにしぼっているか、または自分の職業選択に自信を持っているということが分かった。これらのことから「混乱」、「猶予」と同様に、死が怖く、死に対する関心も高い人は、その生を大切に生きたいという気持ちが強く、そのためにはどうしたらよいのかということ熟慮したために、職業の決定あるいは職業選択への強い自信につながったと考えられる。これは“心的に発達した人は、生と死の両者に対して、肯定的な姿勢、意義や有用性を見出そうとする姿勢を持つようになる”という丹下（1995）の指摘に、つながるものといえるのではないか。

次に「安直」が「解放としての死」・「生の目的・希望」・「性別」に有意に影響を与えられていることから、人生の目的意識を強く持っていて、さらに死を解放として考えている男性は、自分の関心を職業に結びつけない、他力本願的な考え方をしていることが明らかになった。これは、与えられた目標（受験に勝つこと、希望の大学への入学、一流企業への就職など）に向かって、盲目的に専念してきたため、自己同一性を完全に確立しないまま、未熟な職業選択への態度をとることになったと言えるのではないか。そして結果からはこの傾向が男性に多いと分かった。このことは、女性がより自己同一性を確立していることにはつながらず、文化的背景によるものと考えられる。性別、専攻別と職業観の関係の項でも述べたが、女性の社会的地位は年々上昇しているが、根底に流れるものは変わっていないように思われる。つまり文化的な意味合いにおいて、男性にとっての職業とは、社会的にも、家庭に対しても、重要な責任を意味しており、悪くいえば、逃れられない責務となっている。下山の指摘にある、男女によって安直傾向の意味合いが異なることと背景を同じくしていると考えられる。

また「模索」因子がいずれの属性にも影響を受けていなかった。その他の結果と合わせて考えると、全体的に今現在1回生から3回生である青年達が、積極的に職業について考えておらず、他力本願的な考え方を持っていることを見出すことができる。このような傾向は、先行研究で指摘されたことと重なり、最近、青年の自己同一性確立が延長され、その影響として心理・社会的モラトリアム期が延長されて職業決定が遅れていることを説明できるものである。

4-3-2) 死生観を従属変数、職業観を説明変数とした場合の結果について

次に職業観が自我同一性確立の一つの指標であるという視点から、死生観を従属変数、職業観を説明変数とした場合の結果について考察する。

下山（1986）によると、「決定」因子はその性質から高い自己同一性の確立度を示しており、「模索」因子も職業決定に対する積極性から、他の因子よりも自己同一性の確立を多少なりとも示唆していると考えられる。職業決定に関して「混乱」傾向が強いほど、自分の未確立が予測されるのに対し、「決定」傾向が強いほど、逆に自分の確立の進展が予測される。加えて「安直」傾向が強い場合には、何らかの外的基準に依拠して自己決定をしようとする自己統制能力があるのに対し、「猶予」傾向が強い場合には、決定を回避しておこうとする統制力の弱さがみられる（下山、1986）。

「生の目的・希望」は「模索」から負、「安直」から正の影響を受けていることから、積極的に職業のことを考えていない人、他力本願的な考えをする人は、人生の目的意識を強く持っているという。つまり、自己同一性の確立度が比較的強く、外的基準に依存して自

己統制力を高めようとする人は、人生の目的意識を強く持って生きていると示唆される。

次に「寿命・運命観」は「猶予」・「決定」・「性別」から影響を受けていることから、女性で、今のところ職業について考えたくない人、自分の職業決定に自信を持っている人は、人生は見えない力によって運命が決められていると考えることが分かった。つまり高い自己同一性の確立度を有しているが、自己統制力に欠ける女性は、何らかの外的な力に依存することでそれを克服しようとしていることがいえるのではないかと。

そして「死への関心」は「安直」と「決定」に有意に影響を与えられている。他力本願的な考えを持っていて、自分の職業選択に自信を持っている人は、死への関心が強い。そのことから、高い自己同一性の確立度を有しているが、外的基準に依存しようとする人は、死について積極的に考えることでさらに自己の確立を高めようとしていることが示唆された。

さらに「死に対する恐怖・不安」は「混乱」から負、「模索」から正の影響を受けている。つまり職業選択のことを考えて不安にならなかつたり、混乱しないような人、積極的に職業について考えようとする人は、死に対する恐怖・不安が強い。そのことは、自己同一性の確立度が比較的高く、統制力を持ち合わせている人は、その生を失うことに強い不安を抱いていることにつながる。この結果は、“継時的自己同一性を持ち合わせることで、自分に迫った死を受容する能力へつながる”という柏木(1987)の指摘と、異なるように思える。しかし、柏木の見解が病的・病理学的な死に対する、臨床的な側面からのものであるのに対し、今回の調査対象は健康な青年期の若者であった。実際病にかかり、死に直面した場合に、継時的自己同一性の確立によって受容能力が高まるという指摘は、健康な青年には当てはまらなないと考えられる。かえって青年期の若者が高い自己同一性の確立度を有していれば、自己実現欲求が高まり、生の欲求につながると考える方が自然である。

5. 結論

今回の調査で、職業が文化的・社会的背景の影響を色濃く受けていることが分かり、徐々に変化してきた現代の職業観、役割規範に則した進路指導の必要性も示唆された。さらに先行研究の報告を裏付け、大学生活が心理・社会的モラトリアム期そのものであることを示す結果も得られた。これは、将来の職業に必要なスキルを大学で身に付ける、という意識が低いことを示すものである。市村(1993)によると、職業を自分の能力や個性を發揮する道であり、自己実現の方法であるとする層と、自己実現を職業以外に求める層に分かれていき、後者の割合は増加していくという。自分で見つけた目標に向かって邁進する、という姿勢が薄れているのであろうか。死に対して恐怖を持っており、関心もあるが、自身の生に関して統制力を持たず、他力本願的な考えを持っているという、未熟さが全面にあらわれていたように思う。

今回の調査では、断片的な関連性について述べるにとどまり、概念としての明確な関連性を見出すには至らなかった。しかし、人生の節目の一つとなる就職を考えると、死に裏打ちされた生について考えることは、大きな意味があると感じられる。浦上(1996)は、その研究によって一般的な自己概念の変化が職業的自己概念の変化と強く関連することを見出し、両自己概念の明確化の関連について、より詳細に検討する必要性を強調している。そのような意味において、死生観と自己同一性の関連性が職業観へどのように影響を与え

ているか、就職前と就職後で職業観にどのような違いが生まれるかといった事柄について、さらに深く探求することが求められているのではないか。

6.引用文献

- Erikson,E,H., 小此木啓吾訳 1973 自我同一性 誠信書房
- 平井啓、坂口幸弘、安部幸志、森川優子 1999 死生観尺度作成の試み 未刊行
- 市村洋子 1993 青年期の職業観の発達 青年心理学研究, 第5号, 20-26.
- 柏木哲夫 1987 生と死を支える ホスピスケアの実践 朝日選書
- 望月葉子 1993 青年のキャリアに関する展望—職業生活設計に関する調査研究から— 青年心理学研究, 第5号, 1-10.
- 下山晴彦 1986 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, 34, 20-30.
- SPSS Inc. 1995 SPSS Base System 統計編 Release6.x.SPSS Inc.
- 丹下智香子 1995 死生観の展開 名古屋大学教育学部紀要, 42, 149-156.
- 浦上昌則 1996 女子短大生の職業選択過程についての研究—進路選択に対する自己効力、就職活動、自己概念の関連から— 教育心理学研究, 44, 195-203.